

<書評>

スーザン・マン著、小浜正子、リンダ・グローブ監訳、秋山洋子、
板橋暁子、大橋史恵訳

『性から読む中国史—男女隔離・纏足・同性愛』

(平凡社 2015年 320頁 ISBN: 978-4582482218 2,800円+税)



李 小妹

本書は、アメリカの大学生に新しい見方を紹介する目的でケンブリッジ大学出版局によって企画されたシリーズの一冊として書かれたもので、近現代中国の性（セクシュアリティ）とジェンダーについての歴史研究である。

本書は、前近代、とりわけ明清から21世紀にいたる中国で、ジェンダー関係や性の捉え方にどのような変化が起こり、どういった要素が継承され、また西洋とはどう異なるかを論じたものである。中国史学者である著者のスーザン・マン氏は、西洋基準の歴史的時間感覚で中国の近代史を評定する欧米学界の「悪しき習慣」を批判し、中国の近代化経験も構築されてきた性文化も特有のものであると主張する。たとえば、欧米社会では（女性に関して）「生殖に無関係なセックスや性の喜びに罪の意識を重ねあわせている」に対して、中国では、むしろ性行為が「人間生活における健康の根源」として理解される一面がある。本書のトピックは、ジェンダー関係とセクシュアリティの定義における朝廷／政府の役割から、隔離された女性や社会的に排除された独身男性、纏足や納妾制度や妓女文化などといった議題まで広範にわたっている。

全体は、第一部「ジェンダー、セクシュアリティ、国家」、第二部「ジェンダー、セクシュアリティ、身体」、第三部「ジェンダー、セクシュアリティ、他者」の3部で構成されており、それぞれ3つの章が配され、序章と終章を入れて計11章からなる。

以下、本書の内容をみていこう。序章「^{グイシュー}〈閨秀〉と〈光棍〉」では、『^{おうおうでん}鴛鴦伝』という唐代の恋物語を題材にしつつ、女性は中国の伝統社会において家庭の中に閉じ込められていながらも、その社会秩序の中心に置かれていたという究極なパラドックスを読者に呈示している。父系継承社会の秩序は、女性が男性が活躍する社会から、つまり性的な欲望や婚姻外の性関係から隔離することによって保たれていた。こうして公の場から隔離されて暮らす適齢期の娘たちは〈閨秀〉とされ、いずれ上層男性の妻や妾になる（この場合〈良家婦女〉とされる）。〈閨秀〉の貞操と純潔によって秩序付けられたこのセックス／ジェンダー・システムの中に、〈光棍〉と呼ばれる独身男たちがいる。父系継承社会では男の跡継ぎが必要であるため、当然ながら性比に偏りが生じてしまい、結果的に貧困層において妻子のいない〈光棍〉が増えていく。彼らは、女性の純潔にとって脅威であるため上層社会に恐れられ、また政治の敵対勢力になりかねないため朝廷や政府に監視され、周縁化されていた。性的逸脱を徹底的に排除するため、上層社会の男女隔離が生活空間の区画化によって家庭の中ではじまったように、19世紀の中国社会における女性の隔離は、社会的地位や身分の高い階層ほど優先され強化されていた。20世紀初期、中国社会は「後期帝政時代」から「近代国家」へと推移していく中、改革派や革命家たちは、纏足の廃止や、女性が家庭から社会に出ていくことを呼びかけ、その革命の矛先を女性と家庭に向けた。大きな社会変

動の波に押されて、女性たちの生活様式もジェンダー関係も変化した。しかし女性隔離や性比の不均衡や女性差別など父系継承制度の残滓が今日の中国社会においてもなお影響を及ぼし続けている。

第一部では、家族制度に焦点が当てられ、政権とセクシュアリティやジェンダーとの関わりが明らかにされている。性的活動における規律管理は、〈養生術〉という形で紀元前の王朝社会に遡ることができ、時代の推移とともに支配政権によって強化されてきた。家庭という「内」の領域と「外」の領域に隔離された女-男という二元的カテゴリーは、20世紀中国の革命や政治に都合良く利用されていた。20世紀初期の民族革命による〈婦女問題〉の議論や、共産主義革命期に毛沢東による「女性が天の半分を支える〈婦女能頂半边天〉」という言説など、男女を隔てる境界の消滅を目指したのもあれば、ポスト毛沢東期の1990年代以降に献身的な妻／母という儒教的価値観の復活に対する政策的後押しも見られる（第一章）。セクシュアリティの視角で中国の王朝サイクルを分析することによって、「盛世」においては女性隔離が強化され、王朝交替期においては女性が戦乱の第一の被害者となったことが明らかにされた。現代中国において女性の地位向上が達成されるものの、女性の人身売買は、性比のねじれ構造が加速化する結婚市場や商業経済の復活とともに発展する性産業市場において増加するようになった（第二章）。清代のセクシュアリティやジェンダーに対する規律は、道徳教育と報奨制度に特徴付けられたのに対して、1912年に成立した中華民国政府や現在中国の共産党政権では、法が活用されている。女性の結婚や出産など家族制度を強化する現行の法体系と現代社会の政治経済との間に矛盾に満ちた緊張関係が見られる（第三章）。

第二部では、個人とその身体に光が当てられている。明清期の身体をめぐる言説は、養生や長寿などの道教の見解と儒教や仏教など様々な思想を取り入れて展開されていた。20世紀に入ってから、西洋医学とともに西洋的な観念が紹介され、男女両者の肉体に対する見解が変容した。この変容は医学だけでなく、芸術やスポーツなどの分野においても見られる。しかし、明清期に形成された身体観の影響や中国政府の生-権力によって、医学・芸術・スポーツにおける身体文化は中国特有な形で構築されてきた（第四章）。そして、身体の装飾や身体の振る舞いは、時代を問わず、つねに個人の社会的、文化的、政治的アイデンティティの表徴と見なされ、また道徳の規準や社会的身分、政治的スタンスにふさわしく装うように、個人に期待されていた。満洲族によって征服された時、抵抗の表象として漢人の民族アイデンティティと結びつけられた纏足は、20世紀の革命家によって封建社会による女性抑圧の象徴とされた。満洲族の上層女性の伝統衣服だった旗袍は、20世紀初頭に「モダンガール」や〈新女性〉によって近代的ファッションに変わった（第五章）。装飾される身体がある一方で、放棄される身体も存在している。その一つの形は女性の自殺である。明清期における女性の自殺は、女性の貞操が重視される社会では抗議や道徳的な決断を表明するためのものが多いとされている。しかし、著者は20世紀になっても中国における女性の自殺率が高いままであることに注目している。さらに、共産党政権による一人っ子政策がもたらした負の結果として「女兒殺し〈溺女〉」の実態が呈示されている（第六章）。

第三部では「他者」に焦点が当てられている。中国の伝統社会において、性とジェンダーが医学的に「不定で流動的なもの」として見なされ、同性愛嫌悪（ホモフォビア）は見られなかった。男女隔離の制度の下、明清期に殆どの時間が同性同士で過ごされていたため、圧倒的にホモソーシャルな社会的ネットワークが形成され、とりわけ男同士の性的関係は「寛容に扱われたばかりでなく、首都や重要都市の消費文化にも組み込まれた」。20世紀以降、中国社会における同性関係やトランスジェンダーに対する考えは、西洋の影響を受けつつも、他の文化と異なる独自の性格をみせている。たとえば、現代中国にお

いてゲイとしてカムアウトすることは、近代性の表現であると同時に中国政府の強制的な影響への拒絶と抵抗でもある（第七章）。文学作品に関しては、明清期から20世紀半ばまで一貫として、家族制度内にある親の決める結婚と女性自身の性的な欲望との緊張関係は、創作の原動力であり、物語の中心議題とされていた（第八章）。続いて第九章は、18世紀にそれぞれ清朝とイギリスによって描かれた二枚の絵画を手がかりに、帝国主義的植民政治においてジェンダー役割と性が文化的差異を明確化し象徴する手段として使われることを批判し、また清末から現在にいたる中国社会における様々な異文化間の出会いおよびその都度構築される「他者」の姿を描き出している。終章では、書全体の議論の整理をしつつ、ジェンダーやセクシュアリティと公民性との結びつきについて論じられている。また、近代的公民性への理解におけるセクシュアリティ研究の重要性が示唆されている。

以上のように、本書が示すのは19世紀初頭から半ばにかけての半世紀にわたり、中国社会におけるジェンダー関係やセクシュアリティについての考え方が大きく変化したにもかかわらず、異性愛規範の慣習や父系継承の家族制度が今日まで堅持されてきていることである。本書は「長く続いてきた文化構造、とりわけ父系継承の親族関係や、家族関係を操る力を得た王朝＝国家は、現代中国のジェンダー関係やセクシュアリティに独特の中国らしさをもたらしている」ことを主張している。評者が特に感心したのが、欧米とは異なって、宗教ではなく国家がジェンダーや性の管理に腐心した中国文明が描かれているところである。ひとつだけ問題点を挙げるとすれば、こうした歴史的に継承された性文化への強調は西洋社会から受けた影響を過小評価してしまい、現代中国社会における性やジェンダーへの捉え方の多様で複雑な実態を見損なってしまうことである。課題はあるものの、本書は、中国明清期から現在にわたる社会変動の歴史の中で、これまでほとんど注目されてこなかったジェンダーとセクシュアリティについて、文化の細部や政策・法などとの関わりをめぐる非常に重要な論点を提示している。本書は、ジェンダー研究者や中国歴史研究者は無論、中国の歴史や文化に関心を持つ者なら誰でも興味深く読める一冊であり、ぜひ一読を薦めたい。

（り・しょうめい／武蔵大学社会学部非常勤講師）